



ISSN 1344-7572

研究報告集録 第 128-04

高等学校の授業評価に関する研究

— 高等学校授業改善に向けた
授業評価の在り方 —

平成 25 年 3 月
大阪府教育センター

高等学校の授業評価に関する研究

— 高等学校授業改善に向けた授業評価の在り方 —

〈 目 次 〉

	ページ
I 研究について	1
II 授業評価の効果的な活用の提案	
— パッケージ研修支援を通じた RV-PDCA サイクルの確立 —	2
1 課題把握 (Research)	
2 校内全体研修 (Vision)	
3 指導案作成 (Plan)	4
4 事前授業 (Do)	6
☞ S-T 授業分析とは	
5 研究授業・協議 (Check & Action)	8
III パッケージ研修支援の実践から	
○ 泉鳥取高等学校	10
○ 野崎高等学校	14
○ 吹田高等学校	18
○ 泉尾高等学校	22
IV パッケージ研修支援の成果と今後に向けて	
1 成果 (研修終了後に実施したアンケートにおける管理職による自由記述より)	26
2 課題と今後に向けて	27

研究について

1 研究目的

大阪府教育センターでは、平成 24 年度より、府立高校を対象として、組織的な校内研修体制の確立と教員全体の授業力の向上をめざして、継続的な支援を行う「パッケージ研修支援」を始めた。

パッケージ研修支援を始めた背景には、現在、教員の大量退職・大量採用の時期を迎え、初任者等教職経験年数の少ない教員が増える中で、教員の授業力の向上が現在の大阪の教育における喫緊の課題の一つになっている。その課題改善に向けて単発の研修の積み重ねではなく、授業評価（授業アンケート）の結果に基づく学校の実態・課題把握から始まり、教員間で「めざす授業像」について共通理解を図る校内全体研修、指導案の協同作成、事前授業を経て研究授業・研究協議に至る一連の研修を実施することで、学校全体で授業評価を軸に授業改善に向けた RV-PDCA サイクルの確立を図ることを目的としている。

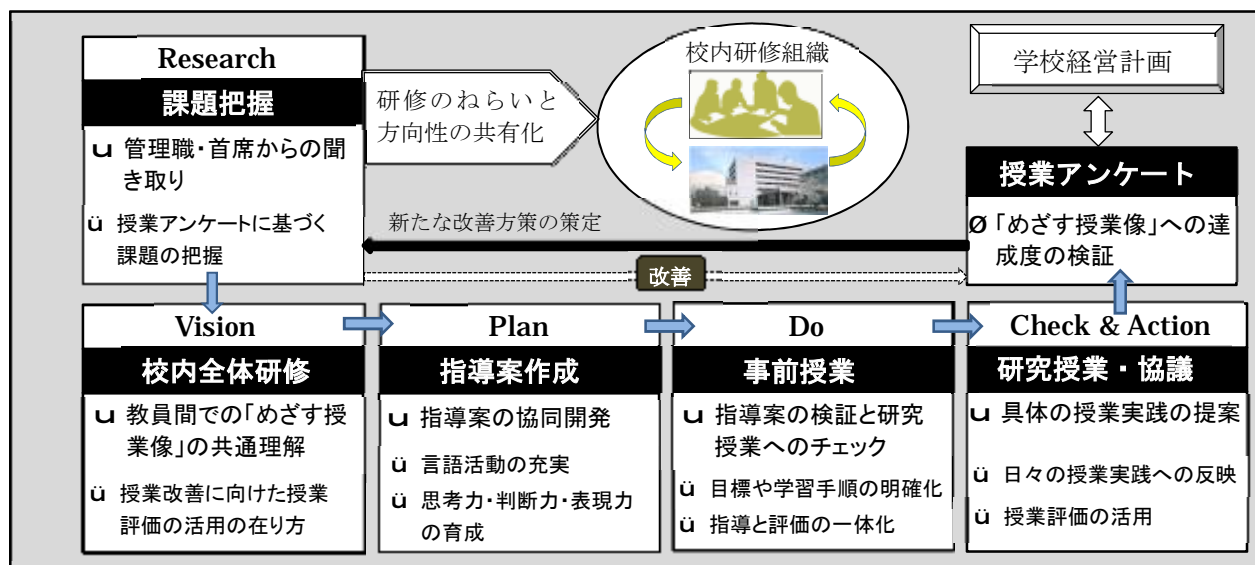
2 研究仮説

パッケージ研修支援を通して、授業評価を授業改善に向けた RV-PDCA サイクルに適切に位置付けることで、学校経営計画における「めざす授業像」の実現を図ることができる。

3 研究方法

- (1) パッケージ研修支援において、研修開始前にすでに実施された授業評価（授業アンケート）等を活用して、授業改善に向けた課題を把握し、研修の方向性を設定する。
- (2) 授業アンケートの結果に基づく課題と課題改善に向けた方策を教員間で共有化し、各学校で授業をつくる際の骨格とするとともに、授業を見る際の共通の視点となる授業評価シート（授業観察シートと呼ぶ）を作成し、教員相互の授業評価を実施する。
- (3) 事前授業及び研究授業では、授業観察シート（教員相互の授業評価）を活用することにより、後の研究協議において、教科の専門性の枠を超えて焦点化された協議が可能となり、研究協議の成果を今後の授業改善に生かすことで、生徒による授業評価（授業アンケート）との関連性をもたせる。

4 研究の全体概要（パッケージ研修支援のイメージ図）



II 授業評価の効果的な活用の提案

— パッケージ研修支援を通じた RV-PDCA サイクルの確立 —

パッケージ研修支援の目的は、各学校の学校経営計画にある「めざす授業像」の実現に向け、授業評価の適切な活用を通して授業改善を図ることである。

授業評価の活用については、まず、生徒による授業評価（授業アンケート）の結果に基づき、授業における課題を把握するとともに、「めざす授業像」の実現に向けた方策（指導上の留意点）をまとめた「授業観察シート」（教員間での授業評価ツール）を作成し、それを授業づくりの骨格及び授業を見る際の共通の視点として活用する。次に、授業観察シートの項目を指導上の留意点として落とし込んだ学習指導案を作成する。その指導案の検証のための事前授業及び研究授業では、教員は授業観察シートに基づき授業を観察し協議するなど教員相互の授業評価を行い、その結果を今後の授業実践に反映させ授業改善につなげる。以下、授業評価を軸としたパッケージ研修支援のプロセスについて説明する。

1 課題把握（Research）

授業評価（授業アンケート）の活用のポイント

- Ⅰ 授業アンケートの結果を精査し、当該校における授業の課題を把握する。
- Ⅰ 課題に基づき、授業改善に向けた方策を考え、研修の方向性を決定する。
 - ü 学校経営計画にある「めざす授業像」と授業アンケートの項目内容に整合性があることが求められる。

めざす授業像の実現に向けた授業改善を目的とした校内研究においては、教員間での正確な生徒の実態把握が基盤となる。そのためには、生徒による授業評価アンケート等の客観的なデータに基づき、誰もが納得できる課題把握に努めることが肝要である。この結果とめざす生徒像とのギャップから校内研究の方向性が決まってくる。

パッケージ研修においては、研修開始前に事前打合せとして、管理職と首席あるいは指導教諭等研修主担者が府教育センターの研修担当者と当該校の学校経営計画にある「めざす授業像」を確認するとともに、すでに実施された授業アンケートの結果から授業における課題を掘り起し、その課題の改善に向けた研修のねらいと方向性について共通理解を図る。また、今後の研修がスムーズに進められるよう、この事前打合せで確認された内容を職員会議等で校内に周知してもらう。



2 校内全体研修（Vision）

授業評価（授業アンケート）の活用のポイント

- Ⅰ 授業改善に向け、RV-PDCAサイクルに授業評価を適切に位置付ける必要性を共通理解する。
- Ⅰ 教員間で「めざす授業像」を具現化する指導上の留意点を策定し、教員相互の授業評価ツールとして「授業観察シート」を作成する。
 - ü 授業アンケートと授業観察シートの項目内容を相互にリンクさせることが大切である。

(1) 府教育センター指導主事による講義

パッケージ研修支援の第1回目には校内全体研修を実施する。研修実施校における授業アンケートからみえる課題をもとに「めざす授業像」を確認し、その実現に向けた具体的な授業づくりの在り方を教員間で共通理解を図ることを目的としている。

全体研修の前半では、府教育センター指導主事が、PISA調査をはじめ各種学力調査等で明らかになった高校生の学力課題や、改正学校教育法で示された学力の3要素とともに、その学力を生徒に身に付けさせるために必要な授業づくりの在り方、特に思考力・判断力・表現力の育成に向けた「言語活動の充実」の重要性を、今年5月に府教育センターより出した「大阪の授業STANDARD」の内容をもとに解説する。

(2) 教員全体でのワークショップ

研修の後半では、前半で示された「大阪の授業STANDARD」の内容を踏まえ、学校経営計画等で示されている「めざす授業像」と授業アンケートの結果とのギャップを確認した上で、各学校における「めざす授業像」の具現化に必要とされる指導上の留意点（各教科科目に共通する授業づくりの要素）について小グループによるブレインストーミングをする。手順は次のとおり。

①各自で授業改善に向けた具体的な指導を考える（個人作業）

例えば、学校経営計画等の中で「生徒の興味や関心を引き出せるような授業の改善と充実」を重点取組として位置付けているならば、その目標の達成に向けて、興味・関心を高める目標の設定や教材・教具の活用、また、意欲を引きだす学習形態や評価の在り方等において、どのような指導が具体的に必要かを教員各自が考え、付箋に記入する。

②出されたアイデアをKJ法により整理する（グループ協議）

各教員は付箋を出しながら改善方策について交流する。次に、出されたアイデアに基づき、KJ法により「めざす授業像」を具現化するのに必要な指導上の留意点を「授業計画（目標の設定）」、「授業展開（指導内容・方法の適切さ）」、「授業分析（振り返り）」等の項目別に整理し、グループとしての考えをまとめる。

③めざす授業像に向けた指導上の留意点を共有する（全体交流）

各グループから発表されたアイデアを受け、指導主事のまとめを通して、全教員で「めざす授業像」の達成に必要な指導上の留意点を共有化する。後日、その指導上の留意点を観点別にまとめた「授業観察シート」を作成し、今後の授業観察時における教員相互の授業評価ツールとして活用する。



【府教育センター指導主事による講義】



【①各自で授業改善に向けた指導を考える。】



【②KJ法によりアイデアを整理する。】



【③各グループから発表する。】

〇〇高等学校 授業観察シート

____月 ____日 ____時間 目 授業担当者 _____ 先生 観察者 _____

〇〇高校の授業スタンダードの確立に向けて

- 学力向上に向けて、思考力と表現力を高める授業づくり
- 学習意欲を高める授業づくり

← 学校経営計画にある「めざす授業像」

	項目	コメント
学習環境	①机上の整理等、学習に向かう環境が整っている。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> 「めざす授業像」を具体化するための教科の専門性を超えた指導上の留意点 </div>
指導方法の適切さ (授業展開)	②授業の導入で、本時の具体的な目標やねらいを明示し、生徒に理解させている。	
	③指導内容に興味、関心をもたせるためにICTや視聴覚教材を適切に活用している。	
	④考えなどを深めるために、グループ(ペア)学習を行うなど多様な学習形態をとっている。	
	⑤生徒の考えを書かせたり発表させたりすることで、言語活動の充実を図っている。	
	⑥授業の最後に、理解度のチェックをしたり、まとめを書かせたりするなど、授業の振り返りをしている。	
個の学習の成立 (生徒理解・授業分析)	⑦生徒の活動のよさを肯定的に評価していた。	
	⑧授業の振り返りで、生徒の一人ひとりが満足感、達成感を味わっていた。	

教員相互の授業評価のツールとして活用

授業アンケートの項目に活用

3 指導案作成 (Plan)

授業評価の活用のポイント

- Ⅰ 教員による授業評価が可能になるように、指導案中の「指導上の留意点」には「授業観察シート」の項目内容を記入する。
 - ü 「授業観察シート」の項目内容を授業づくりの骨格として、また授業を見る際の共通の視点として活用することが大切である。

校内全体研修における指導主事の講義やワークショップを通して共通理解された、今求められる授業の在り方や各学校のめざす授業像、及びそれを達成するための具体的な指導内容を踏まえ、授業者と府教育センター指導主事とが協同して学習指導案を開発する。

パッケージ研修支援での学習指導案の作成において、特に次の点を重視した。

Ⅰ 教員が一方的に教え込む授業づくりではなく、生徒主体の授業づくりになっていること。

そのために、

- 本時の目標や学習課題を明確にして、それに至る活動をスパイラルに配列する。
- 生徒に思考させたり（個人、ペア、グループ）、考えを発表させたりする時間を設定している。
- 生徒の活動のよさを肯定的に評価している。



Ⅰ めざす授業像を具現化する指導が明示されていること

- 指導上の留意点に授業観察シートの項目内容を記入している。
- 目標に準拠した適切な評価規準を設定している。

学習指導案の指導上の留意点に授業観察シートの項目内容を記入することで、授業者は校内全体研修で共通理解した「めざす授業像」の具現化に必要な要素を常に意識して授業をつくることができるとともに、授業観察シートを用いて観察する教員も教科の専門性を超えて、共通の視点で授業を見ることができ、これにより教員相互の授業評価が可能になる。

【学習指導案の一部（英語Ⅰ）】

5 本時の目標

○ 乙武さんの誕生時の様子を絵を用いて英文で書き、それを相手に伝えることができる。

- 英文の内容の要点を理解する。
- 英文の暗唱に向けて音読する。

指導案と授業観察シートの項目内容をリンクさせることで、教員が共通の視点で授業観察ができる。

6 本時の展開（中略）

教師の動き	生徒の活動	指導上の留意点	評価規準
<p>A ウォーミングアップ</p> <ul style="list-style-type: none"> • 本時の目標と主な学習活動を説明する。 • パワーポイントを用いて乙武さんについて英語で質問する。 	<ul style="list-style-type: none"> • 本時の目標と学習活動を理解する。 • スクリーンに映る写真などを参考に英語で質問に答える。 	<ul style="list-style-type: none"> • 本時の具体的な目標やねらいを明示し、生徒に理解させる。（授業観察シート②） • 指導内容に興味、関心をもたせるためにICTや視聴覚教材を適切に活用する。（③） 	
<p>D 音読</p> <ul style="list-style-type: none"> • 全員で Chorus Reading • 音読シートを用いて、ペアで Read & Look up 	<ul style="list-style-type: none"> • 教師の後に続いて全員で英文を読む。 • ペアになり、音読シートを用いて、順番ごとに英文を暗唱する。 	<ul style="list-style-type: none"> • 本時の目標と活動のねらいとのリンクを意識付けさせ、活動の見通しを付けさせる（②） • ペア活動を通して学び合いの機会をつくる（⑤） 	<p>英文を正しく読むことができる。</p> <p>（机間指導）</p>
<p>E 表現・発表</p> <ul style="list-style-type: none"> • 発表のモデルを見せる。 • ワークシートの絵を見て、 	<ul style="list-style-type: none"> • 教師のモデルを見て、活動内容を理解する。 • 絵を見て、内容に沿った英 	<ul style="list-style-type: none"> • この活動が本時の目標であることを確認する。（②） • 言語活動の充実が図れるよう 	<ul style="list-style-type: none"> • 読んだ内容を自分の英語で表現することができる

内容に沿った英文をつくらせる。 ・書いた英文をペアでお互いに読ませる。 ・ Show & Tell で前で発表させる。(数名)	文をそれぞれ2文程度書く。 ・ つくった英文をペアで読み合う。 ・ 声量、アイコンタクトに気を付けて前で発表する。	に、学習手順を明確にする。 (④) ・ 生徒の活動の良さを評価する。(⑦)	る。 ・ 内容が相手に伝わるように音読できる。
---	---	---	----------------------------

4 事前授業 (Do)

授業評価の活用のポイント

- I 授業観察時に学習指導案とリンクした授業観察シートを活用することで、後の協議において「めざす授業像」との乖離をチェックする。
- II 授業観察シートに基づき協議することで、協議内容が授業を見た感想の羅列ではなく、「めざす授業の具現化」に焦点化されたものにするのが大切である。

(1) 「めざす授業像」との乖離のチェック

授業を観察しながら、授業観察シートのコメント欄に気付いたことを記入する。また、府教育センターの指導主事は^(注) S-T分析ソフトを活用し、授業の客観的データを提供する。後の研究協議では、これらの記録やデータをもとに、学習指導案を検証するとともに、協議内容を授業の改善ポイントに焦点化することで、後日の研究授業の準備をする。



【事前授業の様子（堺上高校）】

(2) 研究授業に向けたシミュレーション

研究授業の目的は、個人の授業の披露会ではなく、学校がめざす授業の提案である。また、この研究授業を通して授業者が「成功体験」を味わうことが今後の授業改善の推進力となる。そのためにも、事前授業後の協議では、授業観察シートの項目内容にしたがい、研究授業に向けて綿密なシミュレーションを行う。



【その後の研究協議】

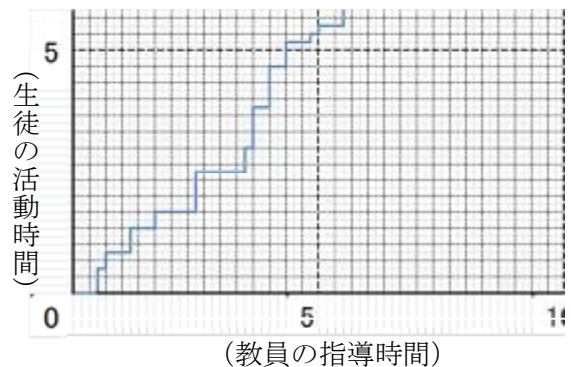
各校で共通するシミュレーションの視点は次のとおりである。

- ① 生徒に本時の目標と取り組む課題の目的や意味を十分に理解させる。
- ② ICT活用を効果的なものにする。(ICT等をいつ、何のために使うか)
- ③ 特に思考や発表の場面における手順の提示を簡潔に、かつ明確にすることで、生徒が活動全体の見通しをもてるようにする。
- ④ 発表させる場合、自信をもってできるように事前にモデルとなる型を示す。
- ⑤ 気づきを導くような発問する。等

【S-T 分析折れ線グラフ】

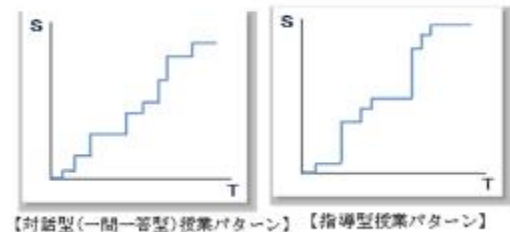
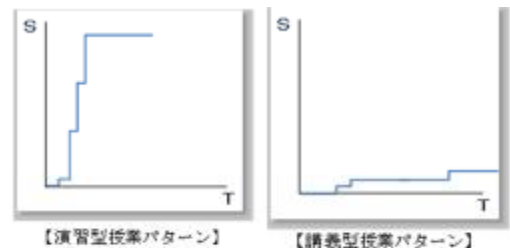
👁️ S-T 授業分析とは

授業において、一定の時間（30秒など）毎に、児童・生徒〔S〕と教師〔T〕の行動と内容を記録し、そのデータに基づいて作成したグラフを基に、授業中の生徒と教員の行動関係がどのように現れているかを分析するものである（右の【S-T 分析折れ線グラフ】参照）。



特徴的な4つのパターンとして、

- ① 生徒の活動時間が長い縦長のグラフ（演習型）
- ② 教員の活動時間が長い横長のグラフ（講義型）
- ③ 細かい階段状のグラフ（対話型または一問一答型）
- ④ ①～③が組み合わされたグラフ（指導型）がある。



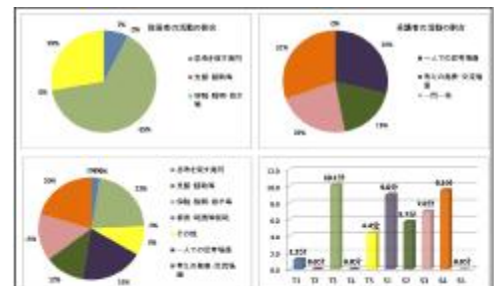
活動内容は、

生徒〔S〕：1人での思考場面、考えの発表・交流場面、一問一答、音読・実験等、その他

教員〔T〕：思考を促す発問、支援・援助等、解説・説明・指示、板書・範読等模範、その他 のように分類できる。

S-T 授業分析を活用すれば、授業検討会等において、客観的データにより授業の「見える化」が図られるので、単なる印象だけを手がかりに話し合いを進めるのとは異なり、生産的な議論を展開することができる。

なお研究協議等では、描かれた折れ線グラフや円グラフだけを見て授業を分析するのではなく、観察者による授業観察シートとともに授業検証の一つのツールとしてグラフを活用することが望まれる。



府教育センターの Web ページからダウンロードできる「観点別 S-T 分析ソフト」を活用すれば、教員、生徒の活動量の比較だけでなく、活動の内容（質的側面）の分析も可能である

5 研究授業・協議 (Check & Action)

授業評価の活用のポイント

- Ⅰ 研究協議の内容を焦点化し実効性のあるものとするため、「指導上の留意点」と授業観察シート
の項目内容に対応させながらコメント欄に感想を記入する。
- Ⅱ 研究協議においては、教員相互の授業評価は授業の良し悪しを判断するものではなく、今後の
自身の授業改善の Action に結びつけるものと共通理解できるようにすることが大切である。

(1) 研究授業 (教員相互の授業評価に基づく提案授業)

研究授業は、教科や個人の力量に任された授業の発表会ではなく、授業の良し悪しを判断する場でもない。パッケージ研修支援の第1回校内全体研修で共有化した「めざす授業像」の達成に向けた具体的な提案授業であり、また、その達成度を全教員でチェックをする場である。

研究授業は個人の授業の参加者は授業観察シートに基づき、学習指導案中の「指導上の留意点」と対応させながら授業を観察する。このような教員相互の授業評価を行うことで、観察者の間で授業を見る観点が共有化され、高校での研究授業の大きな壁となる教科の専門性の枠を超えた共通の視点で授業を見ることができる。



【研究授業の様子 (日本高校)】

(2) 研究協議 (今後の授業改善に結びつける教員相互の授業評価の場)

研究授業の振り返りの場としての研究協議が、ともすれば授業を見た感想だけが羅列されたり、自分の専門教科でない教員からは全く意見が出なかったり、逆に厳しい意見の応酬で授業者が失敗感を味わってしまうような非生産的な時間にならないように配慮しなくてはならない。研究授業の成果を今後の日常の授業実践に反映させ、授業改善に向けた Action に結び付ける場にできるように、パッケージ研修支援では、次の点に留意した。



【研究協議でのグループ協議の様子 (芥川高校)】

① 目的を明確にした協議の手順

研究協議においては、この協議は「めざす授業像」の実現に向けて今後の学校全体の授業改善について交流・共有化する場であることを確認した上で、教員相互の授業評価のツールである授業観察シートが実効性のある協議の軸になることを全教員で共通理解しておくことが大切である。

② 「協議の視点」の明確化

協議内容が感想だけで終わったり意見が拡散したりしないように、参加者は研究授業中に記入した授業観察シートのコメントを踏まえながら交流をすることで、視点を明確にして協議を焦点化し、議論の内容を深める。



【研究協議でのグループ協議の様子 (貝塚南高校)】

次はパッケージ研修支援における研究協議の進め方の一例である。

Ⅰ 首席・指導教諭等研修担当者による研究協議のねらいの明確化と「めざす授業像」の確認

Ⅰ 授業者による授業の意図の説明と事前授業からの改善点の確認

Ⅰ 授業ビデオを使つての授業分析

- ・ 高校の現状では、全員が研究授業に参加することができず、多くの教員が研究協議のみに参加することもある。そこで、研究授業において、授業観察シートの項目内容の中で特に重視したポイントとなる指導場面を 15 分程度に編集したビデオを映写し、研修担当者等が授業分析をする。

Ⅰ 授業観察シートに基づくグループ協議

- ・ ビデオによる授業分析に基づき、授業観察シートの項目から焦点化されたテーマについて、参観中に記入したコメントを活用してグループ別に協議する。その際、付箋を使った KJ 法やマトリックス型のワークシートを用いて議論の活性化を図る。

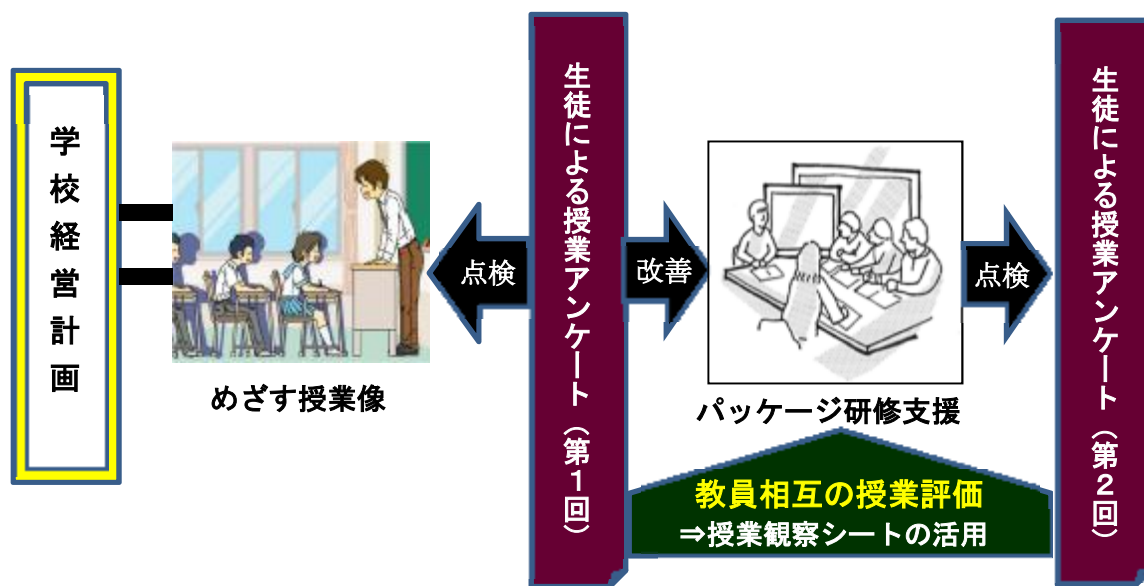


【付箋を使って議論を深めます。】

Ⅰ グループによる発表、及び討議内容の共有化

- ・ 討議終了後、各グループから討議内容を発表する。研修担当者は、授業改善に向け研究授業と協議の成果を今後の日々の授業実践に生かす手立てを共有化できるようなまとめを行う。また、授業者にとって、当該研修が「成功体験」となって今後の授業づくりに向けての自信と意欲につながるように、全体の議論を総括する。

★パッケージ研修支援における RV-PDCA サイクルでの「授業評価」の位置付け



Ⅲ パッケージ研修支援の実践から

泉鳥取高等学校

— 首席が核となり、学校の「めざす授業像」の具現化に向け校内研修体制を構築（その1） —

課題把握

①学校経営計画から

泉鳥取高等学校では、学校経営計画において、生徒一人ひとりに「自ら学ぶ力」を習得させ、やる気や自尊感情をはぐくむ学校をめざし、「ICTの活用による『わかりやすい』授業づくり」を今年度の重点目標にしている。また、今年度の取組計画において、授業アンケートの質問項目「授業を楽しみながら前向きに取り組んでいる」に対する肯定的な回答の5%上昇をめざしている。

②課題把握から

パッケージ研修支援の開始前における教頭と首席との打合せでは、学校教育自己診断の「授業がわかりやすく楽しい」や「教え方に様々な工夫をしている先生が多い」の項目に対する生徒による肯定的な回答が40%前後であることに「めざす授業像」とのズレがあることを確認した。

学校の状況が落ち着いてきていることに加え、教職経験年数の少ない教員の授業改善に対する意欲が高いことから、パッケージ研修支援を通して、首席が研修の核となり、「わかりやすく生徒のやる気を引き出す授業」の実現に向けた泉鳥取高校の授業スタンダードの実現に向け、学校全体で取り組んでいくことを確認した。

特長1 めざす授業像の具現化に向けた活発な議論（校内全体研修）

(1)めざす生徒像の共有化

8月23日の行われた校内全体研修には約40名の教員が集まった。研修は、授業アンケートのデータから見える課題を踏まえ、教員間で「めざす生徒像」を共有化するワークショップで始まった。「授業を通して生徒に身に付けさせたい資質と能力」というテーマで小グループに分かれ活発な意見交換が行われた。各グループからは、自尊感情の醸成や、他人を思いやる心、協調性・共感性、コミュニケーション能力、また思考力や表現力など、今まさに学力調査等で浮き彫りになっている様々な課題が出された。



【「めざす生徒像」についての意見交換】

(2)めざす授業像の実現に向けて

次に、ワークショップで出された課題を改善する授業づくりについて府教育センター指導主事からの講義があり、続いて講義の内容を受け、「めざす授業像」の実現に向けた指導の在り方について、グループ協議を行った。

泉鳥取高校のめざす授業像である「わかりやすく生徒のやる気を引き出す」授業をつくるためには、①生徒に本時の目標を明示し、何ができたかを理解させる、②教科書の内容を身近な内容



【「めざす授業を達成するには」というテーマで盛り上がったグループ協議】

と結び付けることで興味や関心を高める、③活動についてスモールステップを設定し、一つ一つクリアさせる、④活動について、生徒をしっかりと褒めて有能感を高めるなど、前半のワークショップや講義の内容をよく踏まえた優れたアイデアが次々と出された。

泉鳥取高等学校 授業観察シート		
____月 ____日 ____時間目 授業担当者____ 参観者____		
目 標 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; display: inline-block;"> <ul style="list-style-type: none"> ⓪ すべての生徒にとってわかりやすい授業づくり ⓪ 学ぶ楽しさを味わわせ、やる気を引き出す授業づくり </div>		
	項 目	コメント
目標の設定	①授業の導入で「本時の目標」を明確にし、何ができたらいいかを生徒にしっかり理解させている。	
指導内容の適切さ	②教科書の内容を身近な内容に結び付けることで、学習内容への興味や関心を高めている。	
指導方法の適切さ	③生徒の反応を踏まえながら、わかりやすい説明がなされている。	
	④手立てを明確にして、生徒に考えさせたり発表させたりしている。(目標達成に向けたスモールステップの設定)	
	⑤生徒どうしの教え合いや学び合いの場面を設けている。	
	⑥達成感を味わわせ、有能感を高めるために、生徒の発表など活動のよさを具体的にほめて評価している。	
個の学習の成立	⑦1時間の授業の振り返りで、生徒の一人一人が満足感を味わっている。	

特長 2

めざす授業像に近づける模擬授業（事前授業）

(1) 数学科における事前授業

泉鳥取高校では、数学科と家庭科でパッケージ研修支援を実施した。数学科における事前授業では、まず、通常の時間割の中で事前授業を行い、その後、めざす授業像に一層近づけるために、首席が中心となり、できるだけ多くの教員が集まれるように放課後に模擬授業としての事前授業を計画した。

泉鳥取高校は、学校全体で初任者等教職経験年数の少ない教員を育てようとする意欲が溢れており、事前授業には教頭や首席を含め、各教科から教員が参加した。模擬授業では生徒役になっている他教科の教員から、説明や発問・指示の在り方等、数学科の教



【教員が生徒役になった数学科の事前授業】

員には気付きにくい生徒の視点に立った忌憚のない指摘が飛び交い、これらのアドバイスが研究授業に向けた授業改善に大きく役立った。

(2) 家庭科における事前授業

家庭科（「生活技術」）における事前授業（調理実習）は、時間割の授業で行われた。この事前授業後の協議では、授業観察シートの項目の特に①、③、④を重視した。研究授業では、本時の目標を明示し、目標に向かう学習手順を理解させるとともに、その目標の達成を確認する「まとめレポート」の内容を授業の導入で周知させることで書く内容を充実させるなど、「言語活動の充実」をねらうことや、また、わかりやすい説明のためにICTを効果的に活用することなどを確認した。



【生徒たちはみんな積極的に授業に参加しています。】

特長 3

授業観察シートの内容を踏まえた研究授業と研究協議

(1) めざす授業像に向け大きな授業改善が図られた研究授業

ここでは、「イズトリ授業スタンダード」の具体の提案授業として「生活技術」での研究授業を取り上げる。

泉鳥取高校の学校経営計画にある「ICTを活用した『わかりやすい』授業」の実現に向けて授業観察シートの項目内容を軸に授業づくりをした。事前授業から次のような工夫・改善点が見られた。

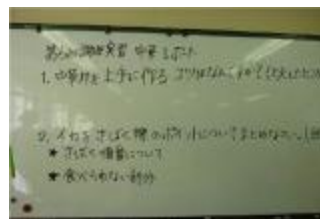
- 見えるところに常に「本時のねらい」と学習活動を明示する【写真1】 ⇒授業観察シート①
- 授業の導入で最後を書く「まとめレポート」の内容を提示する【写真2】 ⇒授業観察シート①
- 生徒のつまずきを予想して、イカのさばき方を解説したDVDを提示する【写真3】 ⇒授業観察シート②③
- 活動がスムーズに進むように、各テーブルにわかりやすいレシピを置く【写真4】 ⇒授業観察シート④

事前授業で課題となった①本時の目標と「まとめレポート」の内容とのリンクや、②ICTの一層効果的な活用等が見事にクリアされ、明らかな授業改善が見られた。

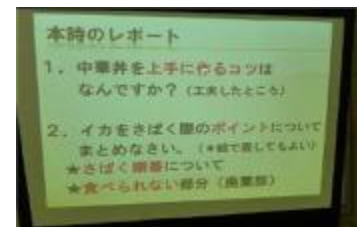
本時の目標は、イカのさばき方を理解し、中華丼の調理に取り組むことであった。授業が始まる前から、パワーポイントとともに、ホワイトボードに本時の目標が示されており、授業の冒頭で最後を書く「まとめレポート」の内容を提示することにより、生徒たちは学習の目標と手順がしっかりと理解できていた。

★めざす授業の実現に向けた工夫・改善

【写真1】



【写真2】



【写真3】



【写真4】



事前授業でも使われたイカのレシピを説明するビデオ「イズトリ 3分間クッキング」も改良され、大半の生徒にとって初体験となるイカをさばくこともスムーズに進み、最後に中華丼をほおぼる生徒たちの顔には達成感と満足感が浮かんでいた。

(2) 授業観察シートをもとにめざす授業像の達成度を検証する研究協議

研究協議は首席が司会となり協議を進めた。

①研究授業のビデオ視聴

研究授業では、授業観察シートの項目から協議内容となるポイントを絞って授業を録画し編集しておく。研究協議をめざす授業像の達成度を検証するため、教員間でビデオを見る視点を共通理解した上で視聴する。

②グループ協議（教員による授業評価）

研究授業時に記入した授業観察シートを活用してグループ協議を行う。協議ポイントに基づきビデオを視聴し協議することで協議内容が焦点化されるとともに、協議を通して各自の授業づくりへの振り返りができ、今後の授業改善への気付きも生まれる。

研究授業を終えての研究協議
ー学習意欲を高める授業をめざしてー

- ①授業者より
 - ・本時のねらいと事前授業からの改善点
- ②授業ビデオ視聴（10分）
 - ・研究授業で予め焦点化したポイントの録画を視聴
- ③グループ協議（15分）
 - ・「授業観察シート」の項目からポイントを絞ってディスカッション
- ④グループ発表
- ⑤発表を受けて授業者からコメント
- ⑥府教育センター指導主事より
 - ・指導助言

最後に

泉鳥取高校では、パッケージ研修支援に養護教諭や実習教員も参加されるなど、授業改善に向け学校の一体感が感じられる取組となった。校内全体での研修実施に向け、常に首席のイニシアティブにより、特に研究授業や協議では授業観察シートを軸に教員全員が同じ視点で授業を見て評価ができるように工夫されていた。

めざす授業像の明確化と、それに至る指導の在り方として共有化された授業観察シート、その観察シートの項目内容に基づく授業づくりと授業評価の視点、この3つの要素のそれぞれが相互に関連付けて取り組まれたのが授業力向上に向けた泉鳥取高校のパッケージ研修支援であった。

野崎高等学校

— 首席が核となり、学校全体で教職経験年数の少ない教員の授業力の向上を図る取組 —

課題把握

(1) 学校経営計画から

野崎高校では、学校経営計画において、「生徒一人ひとりの学習意欲を高める授業」をめざし、その授業づくりにむけて全教員が授業改善に努めるとともに、授業評価の組織的な取組とその活用方法を工夫することを今年度の重点目標としている。また、今年度の取組計画において、生徒の授業アンケートにおける「授業満足度」を65%にすることをめざしている。

(2) 課題把握から

パッケージ研修支援の開始前における首席との打合せでは、

- 授業力の向上を今後の学校のテーマとしたい。
- パッケージ研修支援を通して、ベテランのもつ指導技術を経験の浅い教員に伝承させることで、「教科の再生」を図りたい。
- 2年前より実施している授業アンケートでは、生徒は勉強に不得意感をもっているが、概ね前向きに考えていることがわかった。
- 授業アンケートでは、生徒の考えを引き出すような授業を展開している科目は評価が高い。パッケージ研修支援を通して、こういう授業づくりを全体化したい。

ということが提案され、今後の研修の方向性を確認した。

特長 1 ▶ ベテラン教員が教職経験年数の少ない教員をリードする校内全体研修

(1) 「めざす生徒像」の共有化

夏休みも終盤の8月30日に校内全体研修が実施された。当日出張で不在の教員を除いた全ての教員（52名）が研修に参加し、会場の図書館が教員でいっぱいになるという、まさに授業改善に向けた学校の強い意気込みが感じられる全体研修となった。

前半のワークショップでは、「授業を通して生徒に身に付けさせたい資質と能力」について共通理解を図った。協議では、どのグループもベテラン教員が教職経験年数の少ない教員を積極的にリードすることで、たいへん活発な意見交換がされるなど、首席が打合せの際に重視していたパッケージ研修支援のねらいが具現化された姿がみられた。

このワークショップでは、授業を通して身に付けさせたい力として、

- 自尊感情や他人を理解する力
- 傾聴する力や適切に思いを伝える力
- 何事も最後までやりきる力

など、生徒の課題を踏まえて授業を通して身に付けさせたい資質と能力が明確化された。



【教員の熱気が溢れる校内全体研修】



【ベテラン教員が協議をリードしている様子】

(2) 「めざす授業像」の実現に向けて

府教育センターの指導主事の講義に続いて、後半のワークショップでは、めざす授業像の具現化に向け「分かる授業を通して生徒の学習意欲を高める」指導法についてグループ協議を行った。各グループからは

- ・ 反復学習を通して『できるようになった』感覚を味わわせる
- ・ 学習内容を身近な内容に結びつけ興味関心を高める
- ・ 生徒どうしの学び合いの場を設ける
- ・ 生徒に思考させたり発表させたりする機会を設ける
- ・ できたことをしっかりとほめる

など、生徒のよりよい変容につながる授業づくりの要素について優

れたアイデアが出された。また、発表する教員が短時間で説得力のある説明をされる姿がたいへん印象的であった。



【グループから発表後、めざす授業を具現化する指導の在り方を共有化している様子】

野崎高等学校 授業観察シート

____月____日____時間目 授業担当者_____ 参観者_____

目 標

〇 分かる授業を通して、生徒一人ひとりの学習意欲を高める授業づくりに向けて

	項 目	コメント
目標の設定	①授業の導入で「本時の目標」を明確にし、何ができたらいいかを生徒に理解させている。	
指導内容の適切さ	②教科書の内容を身近な内容に結び付けることで、学習内容への興味や関心を高めている。	
指導方法の適切さ	③生徒の反応を踏まえながら、わかりやすい説明がなされている。	
	④手立てを明確にして、生徒に考えさせたり発表させたりしている。	
	⑤生徒どうしの教え合いや学び合いの場面を設けている。	
	⑥達成感を味わわせ、有能感を高めるために、生徒の発表など活動のよさを具体的にほめて評価している。	
個の学習の成立	⑦1時間の授業の振り返りで、生徒の一人一人が満足感を味わっている。	

特長2

研究協議に教員全員が参加できるような日程の工夫

(1) 研究授業と協議の日程を別に設定

通常、研究協議は研究授業に続いて放課後に行われる。しかし、高等学校では、時間割上、研究授業に参加できない教員が多数おり、また、研究授業に参加できなかったために、その後の研究協議にも参加しにくいと感じる教員もいる。そこで、野崎高校では、できるだけ多くの教員が研究授業や研究協議に参加できるように、研究授業と研究協議を別の日程で設定した。

(2) 全員が研究授業を見て協議に参加できる工夫

野崎高校では、研究授業の様子をDVDに録画し、それを研究授業に参加できなかった教員は協議の日までに視聴するとともに、気付きを授業観察シートに記入し首席に提出するなど、教員全員が研究授業の内容を熟知した上で研究協議に参加するという優れた工夫がなされた。

・事前授業 11月15日

・研究授業 11月22日

※研究授業に参加できなかった教員は、録画した授業DVDを研究協議に向けて視聴しておく

・研究協議 12月13日

特長3

首席による授業分析を通して授業スタンダードを確認する研究協議

(1) ねらいが明確化された研究協議

野崎高校の研究協議には、最初の校内全体研修と同じく、当日出張で不在の教員を除いた48名の教員が参加した。

図書室の黒板には、「今後の野崎高校の授業改善に向けて」という研究協議のねらいと協議の手順が示され、この研究協議が実効性をもって進むよう準備されていた。

(2) 授業観察シートに基づくビデオによる授業分析

協議の前半は、首席が研究授業のビデオを使って授業分析を行った。「授業観察シート」の項目の中からポイントを絞り（授業観察シート①、②、④）、そのポイントに基づき解説した。

授業者は授業の冒頭に本時の目標を生徒に理解させるとともに、発問を通して生徒から多くの気付きを引き出したり、実験の内容を身近な内容に結びつけることで学習内容への関心を高めようとしたりするなど、パッケージ研修の第1回校内全体研修で共有化した「野崎高校の授業スタンダード」に基づきながら授業を進めていた。その結果、はじめは落ち着きのなかった生徒たちが徐々に授業者に注目し、授業の最後のまとめではたいへんよく集中している姿が見られるなど、パッケージ研修支援による授業改善を通して、生徒によい変容が生じたことを全員で確認した。



【研究協議のねらいと、ねらいを達成する手順が示されています。】



【首席がビデオを使って授業分析をしています。】

(3) 今後の授業改善に向けたグループ協議

協議の後半では、この授業ビデオ分析を踏まえ、今後の各教員の授業改善について小グループで交流するワークショップを行い、改めて野崎高校の今後の授業改善の方向性を全教員で共有化した。このグループ協議においても、第1回校内全体研修で見られたように、ベテラン教員が教職経験年数の少ない教員に様々なアドバイスをしながら協議を進めていく姿が見られ、改めて学校全体で初任者等教職経験年数の少ない教員を育成する気運を醸成されていることに気付かされた。



【各グループから授業改善の具体的な方策が発表されています。】

最後に

パッケージ研修支援における野崎高校の取組で特筆すべき点として、次の三つが挙げられる。

- Ⅰ **めざす授業像の達成に向け、全教員が授業観察シートに基づく教員相互の授業評価を実施した。**
 - ・ 単元計画の中での研究授業の位置付けを考慮し、授業観察シートの項目からポイントを絞って授業を観察したことと協議の前半で行った授業分析の内容がリンクしていたので、後半の協議が実効性のあるものとなった。
- Ⅰ **授業分析の視点を授業者の指導の在り方だけではなく、指導を通して生じた生徒の変容に置いた。**
 - ・ 授業改善の目的は学校経営計画にある「めざす授業像」の達成にあり、その指標となるのが生徒の変容である。研究協議において、授業改善を通して生徒により良き変容を引き起こすのが授業研究のねらいであることを教員間で共通理解できた。
- Ⅰ **全員参加型の研究授業・協議を実施するために日程を工夫した。**
 - ・ 野崎高校が行った全員参加型の研究授業から研究協議への流れは、教科の枠を超え学校全体で授業改善を図る取組として他の府立高校にもたいへん参考になるもので、高等学校における校内研究の一つのモデルとなるものである。

吹田高等学校

—ミドルリーダーが核となり、研究授業・研究協議をリードする取組—

課題把握

①学校経営計画から

吹田高等学校では、学校経営計画において、地域に根差した信頼できる学校として生徒のもつ能力を最大限引き出すことを目標としている。具体的には公開授業、研究授業の定期実施、授業に関する生徒のアンケートの綿密な分析等に基づき、「わかる授業、興味を持てる授業」をめざした授業改善に取り組んでいる。それらの取組の結果として生徒向け学校教育自己診断等における授業等学習活動に関する全ての項目の肯定率を毎年5%以上引き上げるという目標を立てている。

②課題把握から

学校教育自己診断の結果を見ると教職員が思っているほど、授業に関する評価は高くないという結果が出ていた。教員にとっては整理された授業内容であっても、生徒には面白くないという現実があった。その意識のずれを認識することで授業を改善しようという意欲については、実態として教員間でばらつきがあった。パッケージ研修支援を通して、6年目のミドルリーダーが研修の核となり、授業力向上に加えて、全教員が一丸となって前を向くことができる吹高パワーの再結成、再認識の機会にすることを確認した。

特長 1

全教員が積極的に参加するための全体研修会に向けての努力

1 授業者兼研修会の主担でもあるミドルリーダーの積極的行動

授業者自身がパッケージ研修の全体研修会・研究協議会も企画するなどあらゆることに対して積極的に動いた。とにかく一人でも多くの先生方に授業改善に関心をもってもらうという強い思いが管理職及びミドルリーダーにあった。その結果としてほぼ全教員が全体研修会にも参加した。成功した要因は以下の3点にある。

①管理職からの周知徹底

管理職がことある毎にパッケージ研修の名前を出した。職員会議の如く、参加するのが当然という雰囲気醸成した。

②既存の研修組織とのリンク

経験の浅い教員で組織する「吹若」研修会をパッケージ研修とリンクさせた。

③全教職員宛てのメール

全教員に向けて授業者からメールで積極的に呼びかけを行った。「パッケージ研修」という名前だけでは、先生方は積極的になりにくいだろうという思いをミドルリーダーが抱き、パッケージとは何かという解釈と、それに懸ける思い、吹高の現状を長文のメールで先生方に届けることによって、少しでも先生方の興味・関心を引こうと何度も呼びかけを行った。

このようにパッケージという名前の頻出、動き回るミドルリーダーの姿がパッケージ研修支援という未知のものに対する警戒感を和らげた。結果として先生方の根底にある、授業に対する熱い思いを揺さぶり、とても有意義な研修にすることができた。

特長 2**学校独自で改善を加え、進化する授業観察シート**

最初の全体研修会で立てた吹田高校のめざす授業が実践できたかどうかを当センターから提示した下記のシート①を利用して検証した。授業を見る観点を統一したのである。パッケージ研修終了後に行われた授業見学週間では、授業観察シート①をさらに改善し、生徒の視点を取り入れた吹田高校独自の授業観察シート②を作成し、継続した授業改善の一助としている。

以下に授業観察シート①と授業観察シート②を載せる。

吹田高等学校 授業観察シート①

10月2日 6時限目 授業担当者 _____ 参観者 _____

【めざす授業】**〇 目標を明確にし、達成感をもたせるために細かな成功体験を積ませる工夫ある授業**

(目標設定をする 生徒から情報を引き出す 生徒の意欲を高める 生徒に自信をつけさせる授業を実施する 「できた」という気持ちになれる体験を提供する(難しいことを求め過ぎない)

	項 目	コメント
学習環境	①机上の整理等、学習に向かう環境が整っている。	
指導方法の適切さ	②授業の中で、体験活動を行うなど生徒の集中力や達成感を高めている。	
	③一人で考える時間やグループで考えを練り上げる時間、発表する時間を設定するなど、生徒主体の授業展開になっている。	
	④授業の最後に、授業の振り返りをしている。	
個の学習の成立	⑤生徒の活動のよさを肯定的に評価していた。	
	⑥生徒の一人一人が満足感を味わっていた。	

吹田高等学校 授業見学週間(11/19～21) 授業観察シート②

11月__日 __時限目 授業担当者__科__ 参観者__

【授業者としての観点】

	項目	評価
学習環境	①机上の整理等、学習に向かう環境が整っている。	5段階程度の評価ができる 項目を設ける
指導方法の適切さ	②授業の中で、体験活動を行うなど生徒の集中力や達成感を高めている。	
	③一人で考える時間やグループで考えを練り上げる時間、発表する時間を設定するなど、生徒主体の授業展開になっている。	
	④授業の最後に、授業の振り返りをしている。	
個の学習の成立	⑤生徒の活動のよさを肯定的に評価していた。	
	⑥生徒の一人一人が満足感を味わっていた。	

【生徒の観点】

項目	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそうは思わない	そう思わない
1. 先生の説明はわかりやすい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2. プリント等の教材や板書内容はわかりやすい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3. 興味のもてる話や教材がある	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4. 授業の中に規律がある(勝手な行動や私語等に対して先生から注意がある)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5. 全体として授業の満足度は?	満足 <input type="checkbox"/>	やや満足 <input type="checkbox"/>	やや満足できない <input type="checkbox"/>	満足できない <input type="checkbox"/>

特長3 継続して行う全教員一丸となった授業改善への意欲

吹田高校はパッケージ研修が終了した後も組織的な取組として経験の浅い教員を中心とした「吹若会」が、授業力向上に関するテーマを掲げ、来年度に向けての提案を計画している。経験の浅い教員のパワーだけでは生徒に提供できるものに限界があり、経験豊富な先生方と一体となった取組が必要不可欠である。両者の円滑な協力体制を築き上げていく為に、今できることを吹田高校では模索している。どの

先生の授業を受けても一定以上の満足度を生徒が得られるということを目指し、教員の授業力の底上げを図っている。「吹若会」から溢れんばかりのエネルギーを出してもらい、経験豊富な先生方の知識と経験を生かすことにより、授業改善の文化が築きあげられるのではないかと考えている。ミドルリーダーがパッケージ研修の授業者であり、研修の主担者であるという重責を担ったことで、他の教員からの信頼も厚くなりその後の取組が一層行いやすくなったようである。

最後に

吹田高校がパッケージ研修を利用して授業改善をスムーズに行えている成功要因は以下の3点と思われる。

- Ⅰ ミドルリーダー自身が率先垂範者として授業者、研修主担を引き受け、様々な情報を教員全体に周知していったこと。
- Ⅰ パッケージ研修と従来からある経験の浅い教員からなる既存の学校組織をリンクさせ、全体化を図ったこと。
- Ⅰ パッケージ研修の開始当初から管理職がパッケージ研修が終了すれば授業改善も終わるというスタンスではなく、パッケージ研修は授業改善の一つの契機であり、その後も授業改善への努力を継続することこそが大切であると周知していたこと。

泉尾高等学校

—学校のめざす授業像に沿った工夫ある研究授業—

課題把握

①学校経営計画から

泉尾高等学校では、学校経営計画において、「生きる力」と「豊かな心」をもった生徒を育て、地域から愛される学校をめざすとしている。本年度の重点目標の一つに確かな学力への取組を掲げ、授業力の向上を図っている。具体的な取組としては、年3回の授業研究週間、その日のうちに行われる研究協議や生徒による授業評価などがあげられる。それらの取組の結果として生徒に対する授業に関する満足度調査の数値を2%引き上げるという目標を立てている。

②課題把握から

パッケージ研修支援の事前打合せでは、生徒と教員の授業に関する課題について把握していった。生徒の課題として基礎学力が十分ではない点があげられ、その対応策としては1、2年生では10分間の朝学を取り入れたりしているとのことであった。教員の課題としては授業研究週間では毎日研究協議を行っているが、参加する教員が固定化してきているという課題があげられた。授業を工夫改善していこうとする姿勢に教員のばらつきがあるとのことであった。そのような現状を打破する契機としてパッケージ研修支援を行うことを確認した。

特長1 全体研修会における目標・課題の明確化

全体研修では、現在同校が抱えている授業に関する課題を、生徒・教員の両方の面から考えていった。ワークショップ形式で行ったが、以下のような課題が明確になり、それを受けて学校の授業目標が明確になった。

●授業課題

【生徒側】

- ・ 集中力が続かない（生活習慣が不規則）
- ・ 基礎的な学力が身に付いていない
- ・ 学習に対する意欲が少ない

【教員側】

- ・ プリント教材に頼りがち
- ・ 生徒指導に時間が割かれ、教材研究の余裕がない
- ・ 一方的な授業になっている
- ・ 新たな授業へのチャレンジ精神が乏しい



●授業目標

授業の目標を明確にし、教員からの一方向型の授業ではなく、生徒が興味関心を持ち、主体的に参加する授業

特長2

新たな可能性を示した授業

泉尾高等学校では、特長1で示した授業の目標を達成するためのより良い方法を模索していった結果、ディベートという方法を採用した。従来は生徒が主体的にディベート等の話し合い活動を実施することは難しいと敬遠しがちであったが、周到な準備をすることで生徒の主体的な話し合いが成立することがわかった。

1 ディベートを選択した理由

①授業目標を明確にできる

- ・正解のない問題を論題として扱い、深い思考力の養成をめざすことを明示した。

②興味関心を引くことができる

- ・ルールが厳密に決まっており、勝敗が決するのでゲーム感覚で楽しめる。
- ・生徒の経験や社会常識でも議論できる論題を設定することで、自分のこととして考えられる

③主体的に参加できる

- ・グループ単位で対戦することにより生徒同士の学びあいができる。
- ・すべての生徒に役割を設け、主体的な参加・達成感を与えられる。

2 泉尾版ディベート（一回のディベートを2時間構成で行う）方法

【第一回戦】

- ①立論 肯定側
否定側
- ②中間審査（ジャッジ）

じっくり考える
内容に対する理解深化

【第二回戦】

- ③尋問 否定側から肯定側へ
肯定側から否定側へ
（作戦タイム）
- ④最終弁論 否定側
肯定側
- ⑤最終審査（ジャッジ）



生徒が進行も務めている。手前はジャッジペーパーに基づき、判定する生徒たち。

3 ディベートを実施指導案

第1学年4組		国語科 国語総合 α 学習指導案	
平成 24 年 11 月 27 日 (火)		第 6 限目	
題材 (単元)	「羅生門」		
目標	<ul style="list-style-type: none"> ・作品の主題について自分のこととして考える。 ・他者の意見を聞いて、自分のものの見方考え方を広げる事ができる。 ・限られた時間で考えをまとめ、議論を通してコミュニケーション能力を高める 		
準備	教科書 ワークプリント		
学習活動・内容	教師の支援	備考	
<p>1.前時の確認と本時の流れをつかむ 10分</p> <p>2.ディベートを行う(反対尋問) 5分×2</p> <p>3.作戦タイム 5分</p> <p>4.討論を行う(最終弁論) 3×2 6分</p> <p>5.振り返り・最終審査を行う 10分</p> <p>6.本時のまとめ 5分</p>	<p>1.本時のねらいと、第一回戦の結果を確認させる。 老婆に対する下人の行為を確認し、双方に再度立論を述べさせる。 本時が第二回戦であり、反対尋問と最終弁論を行うこと、勝敗が決することを伝える。 また、最後には振り返りをしてもらうために、プリントにメモしながら討論をさせる。</p> <p>2.教師は生徒の発言をまとめなおしたり、議論のポイントを板書したり、発言カードを回したりと支援に徹する。議論が滞った場合に適宜、指名や助言を行う。</p> <p>3.ディベーターに最終弁論をまとめさせ、ジャッジに反対尋問の採点をさせる。教師は巡回し適宜助言を行う。</p> <p>4.反対尋問と同様の支援を行う。</p> <p>5.ジャッジに最終の審査をさせる。司会と回収係に集計をさせ、結果を発表させる。集計中は、振り返りシートを記入させる。</p> <p>6.審査結果を発表する。 多数派になったとしてもそれが「正解」と同義ではない事を伝える。 本時のねらいを再確認し、作品を自分の事として考えることの重要性を伝える。</p>	<p>知識・理解</p> <p>話す・聞く能力</p> <p>思考・判断・表現</p> <p>話す・聞く能力</p> <p>思考・判断・表現</p> <p>知識・理解</p>	
評価	<p>A: 討論を通して、視野を広げ、作品の主題についての理解を深めた。</p> <p>B: 自分の立場を踏まえて、討論に参加できた。</p> <p>※プリントの提出状況、達成度、また授業の取組を見て評価する。(関心・意欲・態度)</p>		

最後に

泉尾高校のパッケージ研修の成果、成功の要因及び課題は次のような点にまとめられる。

●成功要因

- ・全体研修で、教科の違いを越えて活発に意見を交換することができ、学校の課題・目標を明確にできたこと。
- ・従来より授業研究週間を定期的に関き、授業改善の基盤が培われていたこと。

●成果

- ・授業者自身が古いスタイルの授業を脱却して新しい授業スタイルを開拓できたこと。
- ・研究授業をとおして、泉尾高校の授業における新たな可能性を全教員に示すことができたこと。

●課題

- ・一回の研究授業だけで終わるのではなく、全教員が継続的に授業改善をめざすような仕掛けをどのように構築していくか。
- ・ディベートができる可能性を示せたので他教科とも連携しながら学校全体の取組として実施できるかどうか。

IV パッケージ研修支援の成果と今後に向けて

1年間にわたるパッケージ研修支援を通しての授業改善に向けた授業評価の活用取組から、現段階における成果と今後に向けた取組について述べる。

1 成果（研修終了後に実施したアンケートにおける管理職による自由記述より）

各学校で教員相互の授業評価を可能にする「授業観察シート」を作成する過程、及びそれを活用して研修を進める中で、次のような成果が表れた。

(1) 各学校におけるめざす授業像とそれを具現化する指導法の共通理解

- Ⅰ 校内全体研修により、教科を超えた全教員がめざす授業像についての認識が共有化された。
- Ⅰ 授業力向上について、学校全体としてめざしている視点が明確になった。
- Ⅰ 事前授業から研究授業までを一つの流れととらえ、学校としての授業の目標を共通理解することが大切であることに教員が気付いた。
- Ⅰ 学校の目標→目標に向けた授業実践→振り返りのサイクルが確立した。
- Ⅰ 研究授業を実施するにあたり、共通の視点で授業をつくり、見学し、また検証することが可能になった。
- Ⅰ 授業に対する本校教員全員の意識のベクトルを合わせることができた。

(2) 初任者等教職経験年数の少ない教員をはじめとした教員の授業力の向上

- Ⅰ 授業者が、常によりよい授業をめざして研鑽していた姿勢が、他の教員の授業に対する取り組み方を変えさせた。
- Ⅰ 何度も授業観察をしていただき指導を受けた結果、2か月足らずの短期間で驚くほどの授業改善がみられた。
- Ⅰ 事前授業に比べ研究授業では、生徒主体の生き生きとした授業に変貌していたことが、経験豊富な教員への強い刺激となった。
- Ⅰ 研修前は講義式の授業をしていたが、研修を通して生徒が主体的に活動するための具体的方策や言語活動など双方向的な授業の展開が身に付いた。

(3) 校内研修体制の確立

- Ⅰ 「授業観察シート」の観点で、本校の授業スタンダードの確立に向けて取り組む契機・機運が高まった。
- Ⅰ 教科の枠を超えて、学校全体で共通理解を図り、授業力の向上に取り組むことができた。
- Ⅰ 担当以外の教員にとっても、他の教員の授業観察や研究協議等を通じて、授業改善への積極的な姿勢が波及し、学校全体で校内研修を推進する意識をもつことができた。
- Ⅰ 学校経営計画における目標「授業力の向上」を教員に意識させることができ、組織力の強化につながった。

2 課題と今後に向けて

(1) 授業改善に向けた授業評価の実効性のある活用の在り方の周知

「成果」でも見られるように、パッケージ研修支援の実施校においては、授業評価の効果的な活用を通して授業をつくる視点や見る視点が統一され、めざす授業像の達成に向け授業改善が図られるとともに、教員の授業づくりへの意識の高まりを通して校内研修体制が確立されることがわかった。

一方、未だに授業評価は教員の授業の良し悪しのみを判断するものにとらえ、授業評価システムの導入に抵抗感を感じている学校もあろうかと考えらえる。授業評価は学校教育目標とリンクする内容であるとともに、めざす授業像の到達度を図るツールであり、その評価項目にしたがって授業をつくり、また授業を見ることで教員全体の授業力の向上につながる、つまり授業改善に向けたRV-PDCAサイクルを機能させる大切なツールであることを、研修や研究フォーラム等、様々な機会を利用して伝えていく。

(2) 首席や指導教諭等の校内研修マネジメント力の向上

校内全体研修から研究授業・協議に至るパッケージ研修支援を実りのあるものにするかどうかは、首席や指導教諭等研修担者の研修マネジメント力に懸っているとと言っても過言ではない。研修担者が学校経営計画を理解し、授業力向上を通じた学校改善をめざす管理職の思いを教職員に周知し、学校が一体となってめざす授業像の具現化に向けた取組みを推進する。その組織のミドルアップアンドダウンの中心的な役割を果たすのが首席や指導教諭等である。研修マネジメント力は、校内研修の活性化を通じた学校力の向上には不可欠な資質能力であり、今後も首席や指導教諭、及びミドルリーダーの資質向上に向け、パッケージ研修支援を大いに活用してもらいたい。



大阪府

大阪府教育センター 平成 25 年 3 月発行

〒558-0011 大阪市住吉区苅田 4 丁目 13 番 23 号 / TEL06(6692)1882 FAX06(6692)1898

URL <http://www.osaka-c.ed.jp>